

経済・金融 フラッシュ

7月マネー統計

～日銀の資金供給量が過去最高を更新

経済調査部門 シニアエコノミスト 上野 剛志

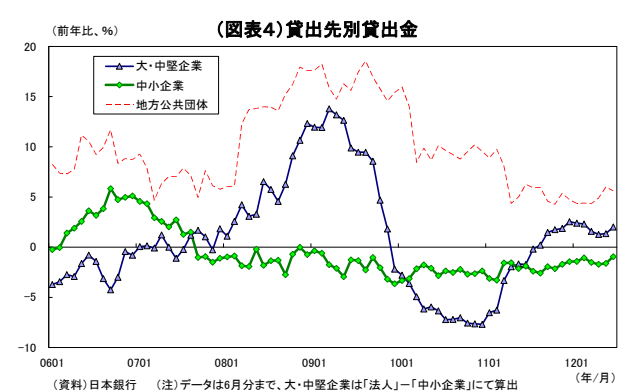
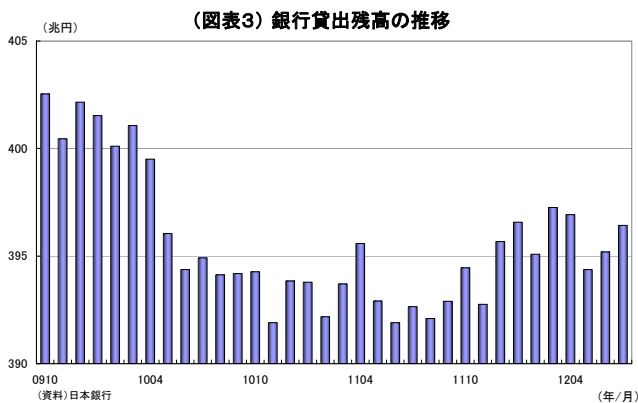
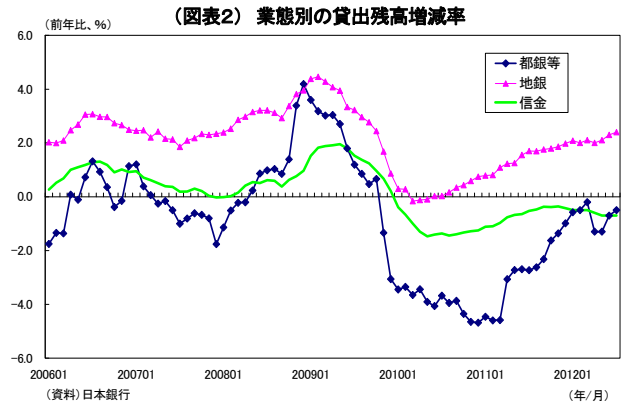
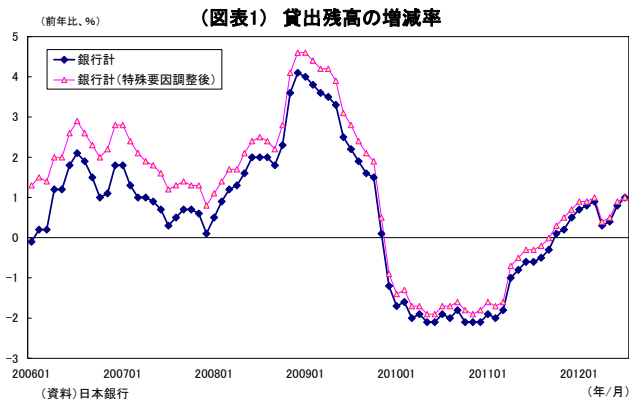
TEL:03-3512-1870 E-mail: tueno@nli-research.co.jp

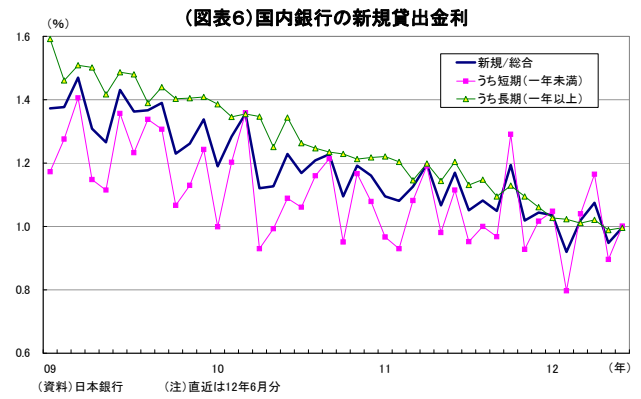
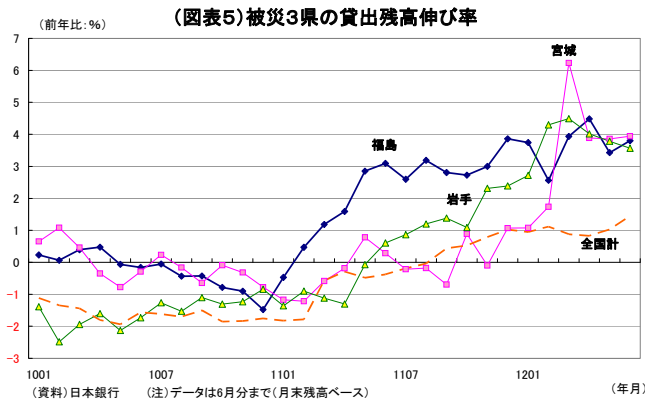
1. 貸出動向：2年9ヶ月ぶりの高い伸び率に

日銀が発表した7月の貸出・資金吸収動向等によると、銀行貸出(平残)の前年比伸び率は1.0%(前月は同0.8%)と2ヵ月連続で伸び率が拡大した。1.0%という伸び率は09年10月以来2年9ヵ月ぶりの高い水準である。

業態別で見ると、地銀が前年比2.4%増(前月は同2.3%増)と伸び率の拡大を続けている。また、都銀等は依然マイナス圏を脱していないものの、マイナス幅は同0.5%減(前月は同0.7%減)とかなり縮小してきた(図表1～5)。

銀行貸出残高は、世界経済の減速や欧州危機緊迫化に伴う設備資金需要等の下振れリスクを抱えつつも、復興に伴う資金需要や電力会社向け貸出増加の寄与などにより緩やかな増勢を維持している。





一方、貸出金利については厳しさを増している。新規貸出金利の推移を見ると、長期（一年以上）、短期（一年未満）ともに低下トレンドを示している（図表 6）。

もともと振れが大きい統計であることや、金利を左右する貸出期間・貸出先の信用力が毎月一定でないことには留意が必要だが、日銀の金融緩和や預金超過構造での激しい銀行間競争による金利低下圧力が強く働いているのはまず疑いが無い。調達サイドの預金金利はもともと殆ど下げ余地がないため、銀行の利ざやが圧迫されている。

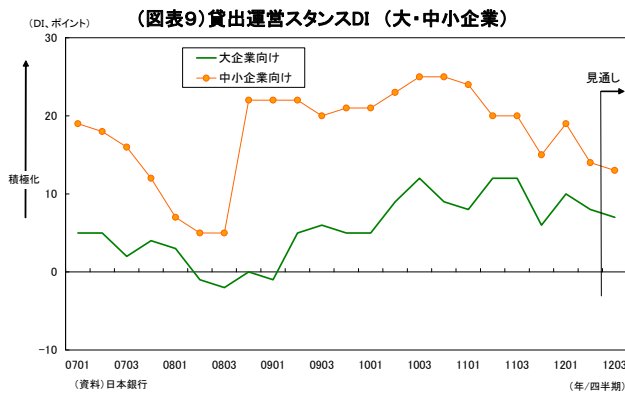
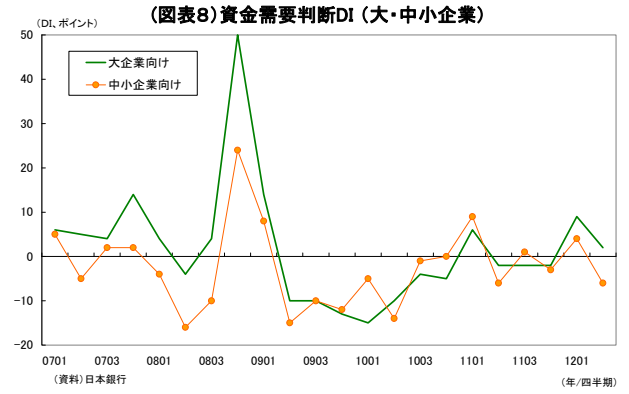
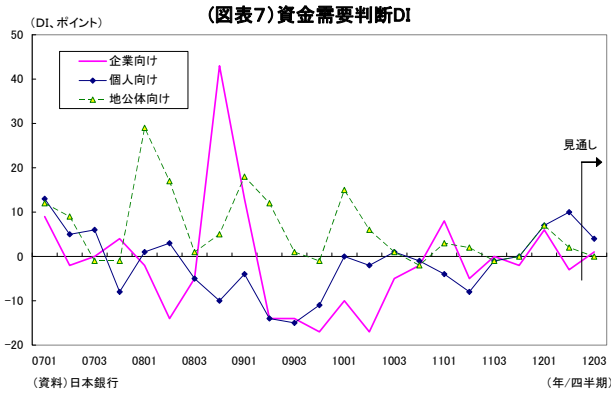
2. 主要銀行貸出動向アンケート調査：企業の資金需要は2 四半期ぶりの減少

主要銀行貸出動向アンケート調査によれば、2012 年 4-6 月期の銀行から見た企業の資金需要増減を示す企業向け資金需要判断D.I.は▲3と、前回(1-3月期)の6から9ポイント悪化した。D.I.のマイナス(=「減少」回答の優勢)は2 四半期ぶりとなる。企業規模別では、大企業が2(前回比7ポイント低下)、中小企業が▲6(同 10 ポイント低下)と、とりわけ中小企業の需要減が顕著になっている。減少の要因としては、大企業では「設備投資資金の減少」が、中小企業では「売上の減少」がそれぞれ最多になっている。

一方、個人向け資金需要判断D.I.は10と前回比で3ポイント改善。改善は4 四半期連続となる。住宅ローン、消費者ローンともに改善したが、住宅ローンの増加理由では、「住宅投資の拡大」が最多となった。今回は、企業の資金需要減少を個人向けが下支えした構図になっている。

今後3ヵ月の資金需要見通しは、企業向け・個人向けともにプラス(改善)が見込まれているものの、プラス幅は小幅に留まっており、資金需要は概ね横ばい圏で推移するとの見通し(図表 7,8)。

また、4-6月期の銀行の貸出運営スタンス変化を示す貸出運営スタンスD.I.は、大企業向けが8(前回比2ポイント低下)、中小企業向けが14(同5ポイント低下)と、引き続き貸出運営を積極化したという結果になったが、積極化の動きは鈍化してきている。また、先行きもさらに鈍化する見通し(図表 9)。

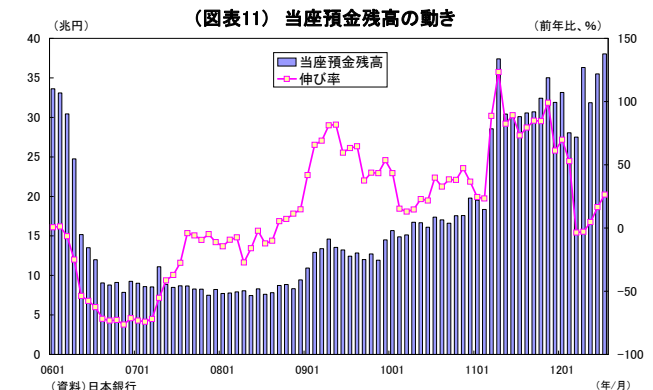
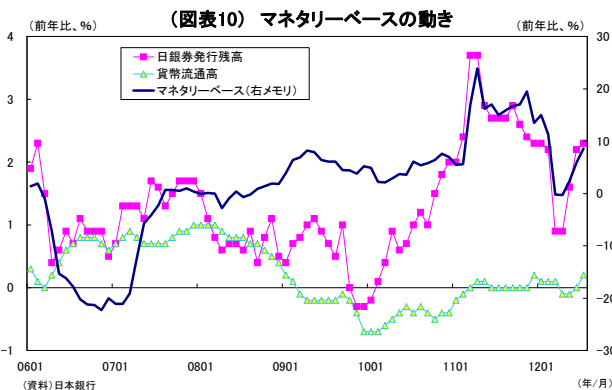


3. マネタリーベース： 伸び率が拡大、残高は過去最高を更新

日銀による資金供給量(日銀当座預金+市中のお金)を示す7月のマネタリーベース(平残)伸び率は前年比 8.6%(前月は同 5.9%)と、プラス幅を拡大した。前年比プラスは 3 ヶ月連続となる。日銀当座預金の伸び率が前年比 26.4%(前月は同 16.5%)とかなり拡大した影響が大きい(図表 10,11)。季節調整済み前月比年率の伸び率も 32.4%と 2 ヶ月連続で大幅なプラスを維持している。

水準でも、マネタリーベース残高(平残)が 123.5 兆円、当座預金残高 38.1 兆円と、ともに過去最高を更新している。資産買入れ等による日銀の潤沢な資金供給がこの要因である。

今後とも日銀は資産買入れを進めていくため、これに伴う資金供給によってマネタリーベースは高水準かつ前年比プラスで推移する可能性が高い。

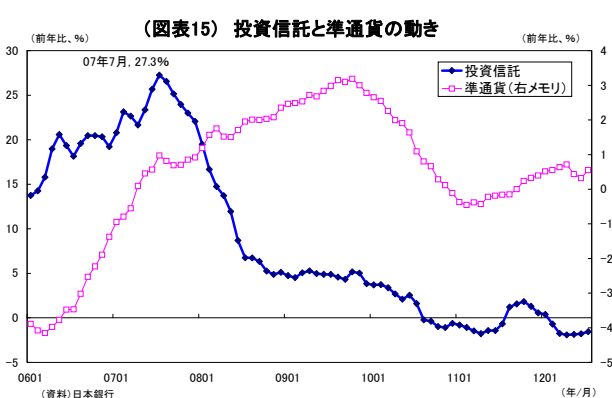
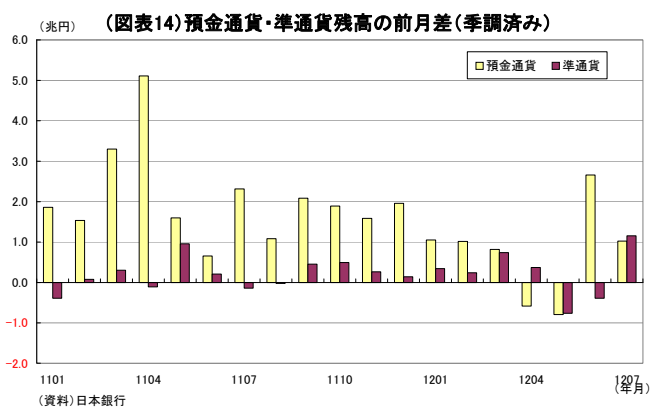
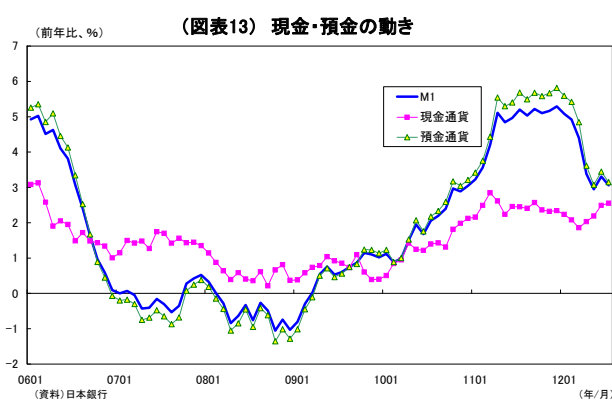
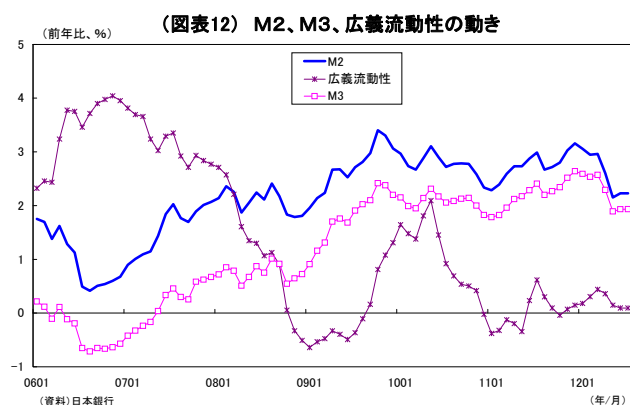


4. マネーストック：投資信託は6カ月連続の前年割れに

通貨供給量の代表的指標である7月のM2（現金、国内銀行などの預金）平均残高は前年比2.2%増（前月も同じ）、M3（M2にゆうちょ銀など全預金取扱金融機関の預貯金を含む）は同1.9%増（前月改定値も同じ）と揃って伸び率が横ばいになった。M3に投信や外債などを含めた広義流動性も同0.1%増（前月改定値も同じ）と前月同様わずかなプラスに留まった（図表12）。

内訳では、預金通貨（普通預金など）の増加がやや鈍った一方で、準通貨（定期預金など）の増勢が強まった。投資信託（元本ベース）については前年比1.5%減（前月改定値は同1.8%減）とマイナス幅はやや縮小したものの、6カ月連続の前年割れとなっている。

7月もスペイン情勢など欧州危機を巡る市場の緊迫感が続いたため、資金の流れについてもリスク回避傾向が継続したようだ。



(お願い) 本誌記載のデータは各種の情報源から入手・加工したものであり、その正確性と安全性を保証するものではありません。また、本誌は情報提供が目的であり、記載の意見や予測は、いかなる契約の締結や解約を勧誘するものではありません。